

氏名（本籍）	中塚 朋子（山口県）
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博課第302号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	ジェンダー・アイデンティティの社会的構築 ーある性転換者の自己物語とその社会学的考察ー
論文審査委員	（委員長） 教授 八木 秀夫 教授 栗岡 幹英 教授 中島 道男 教授 森岡 正芳

## 論文内容の要旨

社会は「男」と「女」という二元性を前提とした性別観によって成り立っている。本論文はそのような二元論的性別観がある一定の秩序として構成され、それが人びとのジェンダー・アイデンティティの形成にどのように影響を与えているかを、女性から男性へ性別を変更したT氏の「自己物語」の考察を中心に社会構築主義の理論的方法を用いて検討したものである。

序章「ジェンダー・アイデンティティをめぐる自己物語への接近」では、著者が問題とする「性同一性障害」の現象と「性同一性障害」をめぐる一連の活動で重要な役割をにない本研究における主要な調査対象であるT氏の紹介がなされる。同時に、著者の視座と方法が、M.フーコーの影響を受けたJ.バトラーのジェンダー・アイデンティティ論、A.シュッツの影響を受けたP.L.バーガーとT.ルックマンの社会構成主義、H.ガーフィンケルのエスノメソドロジーの方法論にもとづくものであると著者の思想的系譜が明らかにされる。

第1部「理論と方法」第1章「ジェンダー・アイデンティティ論の検討」では、本研究の基本的概念であるジェンダー・アイデンティティの定義、その概念の成立過程、理論的枠組みの変遷過程が明らかにされる。まず、先行研究の検討からジェンダー・アイデンティティの概念が「性差」の議論を生物学的なものから引き離し、社会や文化による構成的なものへと転換するためにフェミニズム理論家たちによって戦略的に持ち込まれるにいたる成立の過程が示され、次に、その概念を発展させたJ.バトラーや荻野美穂による理論が詳細に分析検討される。そこから本研究における著者の基本的視点、すなわち「いわゆる『性差』と呼ばれる差異が『社会的秩序』として重要な意味を持つ限り、『性差』

として特定の差異を際立たせながら身体は構築される。そして、そのような性の二元制のもとで構築された身体、つまり『ジェンダー化された身体』を人びとは生きているということになる」が示される。本章の後半は、本研究の調査の主要な対象者であるT氏の活動にとって重要な課題である「性同一性障害」概念を定義する活動の検討を行っている。そこでは、医学的言説が人びとの自己定義や性別観に与える影響と問題性について詳細な分析が行われている。

第2章「自己物語論の検討」は、この論文の方法論を明らかにする章である。C.W.ミルズの「動機の話論」を中心に自己物語を形作る動機の話論を明らかにするとともに、E.ゴフマンの「生活誌」の概念の検討を通して著者による「自己物語」の概念が示される。著者の理論枠組みの基礎が提示されている章である。

第3章「方法論の検討」は、前2章を踏まえ、ジェンダー・アイデンティティをめぐる自己物語を考察するための方法論を検討したものである。自伝的テキストに示された作者のジェンダー・アイデンティティが、テキスト外でなされる他者との相互行為に影響を受けるという本研究の中心的論点が提示される。

第2部「調査」は、第1部で検討された方法を用いて、ある性転換者T氏のジェンダー・アイデンティティの構築の過程とそれに関連する諸問題を検討し分析したものである。

第4章「自己物語の構成とその変容（1）－ジェンダー・アイデンティティの医学的言説－」は、T氏の自伝的テキストの分析によって性転換に関する意味づけの形成と変容を「性同一性障害」という医学的言説を中心に分析したものである。T氏の「男」としてのジェンダー・アイデンティティは終始一貫したものであるが、自分が「男」であることを説明するための話論は、他者との相互行為を通して変容する。また、他者との相互作用と、新たに獲得された話論によって自己物語が再構築されていく過程が分析される。

第5章「自己物語の構成とその変容（2）－ジェンダー化される身体－」では前章で行った自伝的テキストによる分析をインタビューによって得られた語りによって再検討したものである。

第6章「自己物語の構成における記憶と記録－ジェンダー・アイデンティティと写真－」は自己物語を構成する記憶と記録の関係を、写真という記録媒体をとおして分析したものである。写真は記憶に対して「物質的な厚み」を与えるものであり、なおかつ写真という媒体を通して「記憶」と「記録」は再構成・再解釈されていく。本章はその課程と、それが個人的な記憶のみならず他者の記憶をも再構成していく過程を分析したものである。

第7章「自己物語の構成と生活誌的作業－ジェンダー・アイデンティティの規範性－」は個人をとりまく人びとの記憶や記録の存在が自己同一性やジェンダー・アイデンティティの維持に寄与していることを分析したものである。個人は他者によって提供される生活誌的情報を参照し自らの自己物語を構成していくのであるが、他者に自己の同一性を期待するがゆえにジェンダー・アイデンティティ

は規範としての性格を持つことを示している。

第8章「自己物語の構成とその記述—ジェンダーかされた身体を生きる—」では、T氏が語る自己物語の分析を行うとともに、自伝的テキストを書くこととそれを読むことについて、アクティブ・インタビューの方法論の検討も含めて分析している。

終章ではジェンダー・アイデンティティの社会的構築の研究についての総括をおこなうとともに、今後の課題と展望を示している。

## 論文審査の結果の要旨

社会は「男」あるいは「女」というカテゴリーによって人びとを二分するような性別観のもとで成り立っている。本研究はそのような二元論的性別論が一定の秩序として成立している社会で人はどのようにそのカテゴリーを参照しながら人生を形づくっているのかを、社会的構築主義の立場から、ある性転換者T氏の自伝的テキストの分析とインタビューによって明らかにしようとしたものである。

第1章「ジェンダー・アイデンティティ論の検討」は2つの部分から成り立つ。前半は本研究の基本的概念であるジェンダー・アイデンティティの成立とその理論的枠組みの変遷を明らかにしたものである。概念の成立過程について、その概念がJ.バトラーや荻野美穂の理論によって発展させられてきた過程が緻密に分析されている。そこから、性的二元論のもつ規範的性格、言説と身体に関連に関する著者独自の視点、「いわゆる『性差』と呼ばれる差異が『社会的秩序』として重要な意味を持つ限り、『性差』として特定の差異を際立たせながら身体は構築される。そして、そのような性の二元制のもとで構築された身体、つまり『ジェンダー化された身体』を人びとは生きているということになる」が導き出される。第1章前半部分において著者がジェンダー・アイデンティティ論の理論的考察において豊富な知識量と優れた分析能力をもつ研究者であることが示されている。

第1章の後半部分は、本研究の調査の対象者であるT氏の活動にとって重要な課題である「性同一性障害」の定義活動の過程を豊富な蒐集資料を駆使して分析したものである。ここでは著者がジェンダー・アイデンティティ論に関する優れた理論家であるだけでなく「性同一性障害」というきわめて現実的で実践的な問題をあつかうにふさわしい社会的事象に対する鋭い批判能力と分析能力をもつことが示されている。以上のように既に第1章において著者が社会学研究者にとって必要な理論構築能力と調査実施能力の両側面において優れた能力の持ち主であることが示されている。

第2章「自己物語論の検討」は、この論文の方法論を明らかにした章である。そこではまずC.W.ミルズの動機の語彙論が、自己物語論を語る社会学の基本視座を象徴する理論として検討される。そこで動機が個人の内部でなく外部に存在することを明らかにした上で、著者は自己同一性の維持を身体性でなく他者からの承認に依存する営みだと指摘する。さらに浅野智彦に依拠しながら、自己物語論の位置づけを行う。しかし、単なる紹介に留まらず、浅野の「語り得ないもの」についての議論を批判しながら徹底的に自己の外部に自己物語の参照点を見いだす構築主義的なライフストーリー分析の方法論を作り上げている。

第3章はジェンダー・アイデンティティをめぐる自己物語を考察するための方法論を検討したものである。社会学の先行の諸業績を丁寧に分析しつつ、生活史研究として自己規定したうえで、本研究

を方法論的に特徴づける自伝的テキストの分析およびインタビューについて徹底した検討を加えている。とりわけ、自伝的テキストで呈示される作者のジェンダー・アイデンティティが、テキスト外でなされる他者および読者との相互行為に影響を受けるという本研究の中心的論点が、前2章の理論的分析を踏まえて説得力ある議論で示されている。第1部の3つの章によって、本研究が、単なる現代的なトピックスについての調査であるだけでなく、社会学の新しい動向を踏まえたすぐれた理論研究でもあると評価できる。

第II部 調査 は第1部の理論にもとづく調査研究である。

第4章 「自己物語の構成とその変容(1)－ジェンダー・アイデンティティの医学的言説－」は、T氏の自伝的テキストの分析によって性転換に関する意味づけの形成と変容を「性同一性障害」という医学的言説を中心に分析したものである。

性転換を正当化するためには性に関する自己認知、T氏の場合は「男」であることの自己認知、を終始首尾一貫したものととして自らを納得させることと同時に、「他者からの承認」を得ることが必要である。本章ではT氏が、自らを納得させ同時に他者を納得させるために「男」であることを説明する語彙が他者との相互作用や、T氏が取り組む課題の変化とともに変容していく過程が分析されている。著者はT氏の自己物語の分析において、1、自己物語はその時々課題によって新たに再構成されていくものであり、2、「自覚されていない動機」が他者との相互作用の過程で「真の動機」として自らの中に組み込まれていくものである、という自己の理論の正当性を証明した。著者の理論が「語りえないもの」に関する本質論議に影響力をもつであろうことは疑問の余地がない。また、他者との相互作用の過程で変容し再構成されるT氏の自己物語の力動的分析は読むものを強くひきつけるものでありストーリーテラーとしての著者の高い能力を示すものでもある。

第5章 自己物語の構成とその変容(2)は、第4章の自伝的テキストの分析にもとづく研究に直接的インタビューの結果を加えることによって、自伝的テキストによる分析方法とインタビューにおけるインタビューアーとインタビューイの相互作用の過程を重視するアクティブインタビューの方法を実践した意義ある章になっている。

第6章では、一部を除いて過去の写真を処分したT氏の行為を出発点に、記録を手がかりに自己物語を構築する過程を分析する。この章では、自伝に基づいてインタビューを行い、逆に自伝をインタビューの結果をもとに読み直すという方法が真価を発揮しており、興味深い結果を得ている。

第7章では、相互行為を通して自己同一性が維持される方法について、E.ゴフマンの生活誌という考え方を中心にして検討されている。生活誌概念は社会学においてこれまでも注目されてきたが、著者は、自己の同一性を維持するものとしての記憶と記録という斬新な側面からアプローチしている。先行研究の検討をとおして諸概念が手際よく整理されたのち、固有名や身体が個人を同定し特定するような固有性や単独性をはじめから持ち合わせているわけではなく、むしろ、情報の複合性こそが人

びとの固有性や単独性という信念をもたらしているという注目すべき論点が、周到な理論的分析と綿密な調査との統合によって提示されている。生活誌と自己物語が形成されるなかで、ジェンダー・アイデンティティは規範性を帯びながら構築されているという論点が提示されることで、ジェンダー・アイデンティティの社会的構築という本研究の中心的テーマはより厚みを増していったといえよう。

第8章はT氏の最新の著書の自伝的テキストを主な分析対象としながら直接的インタビューによる分析との関連を論じたものであるが、調査するものと調査されるものの社会学的考察にとって今後の示唆に富む内容を示したものであるとして評価できるであろう。

本論文は、第一に、社会構築主義の思想にもとづくジェンダー・アイデンティティ論の理論的發展に寄与し、第二に、自伝的テキストによる自己物語論に新たな視点を加えたこと、とりわけ、自己物語が他者との相互作用のなかで再構成されていく過程、さらには相互作用過程において「動機の語彙」が明確にされていく過程を鮮明に描き出したことにおいて高く評価される。

以上の点から、本審査委員会は本論文が奈良女子大学人間文化研究科博士の学位（学術）を授与されるにふさわしいものであると判断する。